

# 宇宙海賊の大いなる英雄学園史

バロンレモンアームズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突然の事故で死んだ少年はヒロアカ世界に転生しツーカーカイザーの力を手にしてヒロアカの主人公緑谷出久達と共に戦う。

# 目次

プロローグ	1
第一話赤き海賊誕生!!	4
第二話へドロ事件	8
第三話雄英高校の勧誘	11
第四話ゴミ掃除と建築会社の令嬢	14
第五話海賊の雄英入試	17
第六話雄英入学	21

## プロローグ

(ん?なんだここは!?精神と時の部屋ってぐらい真っ白な所だな。よく見たら俺の格好も全身真っ白だな。)

男は目が覚めると真っ白い空間におり色々困惑していた。

「目覚めましたか。若き少年よ。」

男が振り向くとそこには白髪で羽の生えて分かりやすく頭に輪っかのある女性がそこにいた。

「え!?あなたは誰?というかここは何処だ。まるで精神病院に閉じ込められた気分だ。」

「私は貴方達現世の人たちで言う神です。所で覚えていらっしやらないのですか?強い衝撃で記憶が一部飛んでしまったのかしら。なら覚え出させてあげましょう。」

女性が手を翳すと男の頭に記憶が流れ出し自分に何が起きたのかを思い出す。

「ああそうだ。俺はあの時飲酒運転をした挙句信号無視をしたけしからん奴が運転した大型トラックに轢かれて呆気なく死んだんだっけ。まじかあ・・・ゼンカイジャーの最終回を見て僅か1時間で死ぬとは・・・ドンブラザーズどんな話なのかが気になるな。」

「あのくそろそろお話よろしいですか?とにかく貴方は死んだという事でこれから新しい世界に行つてそこで第二の人生を送ってもらいます。何か欲しい力などはありますか?」

「ああじゃあ、機界戦隊ゼンカイジャーに出てきたツーカイザーに変身できるギアダリンガーとゼンタイギアとゼンカイジユウギアをくれ。」

「分かりました。これでよろしいでしょうか?」

女性はギアダリンガーとツーカイザー、カッター、リッキーのゼンタイギアとゼンカイジユウギアを創造し男に手渡した。

「まじか。冗談のつもりで言ったのに本当にくれるとは・・・」

「他には何かありますか?あと三つぐらいは願いを叶えることができますよ。」

「え？あんななんでもありだな。そうだな。ゴーカイジャーに変身できるレンジャーキーとモバイレーツいくつかとゴーカイセルラー、ゴレンジャーからゼンカイジャーまでのレンジャーも頼む。あとはレッドとシルバーを除くメンバーに容姿と性格が似た人を仲間にしたいのとクロコダイオーとゴーカイガレオンも欲しい。」

「承りました。あと申し訳ないのですがゼンカイジャーでレンジャーキーにできるのはゼンカイザーとステイシザーだけです。あのキカイノイド四人の力はレンジャーキーにする事ができません。ツーカーのキーの場合は貴方が一定時間変身ができなくなります。それでも大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫だ。寧ろそれぐらいのデメリットがないと困る。その代わり変身不能の間でも戦えるようににはしてくれ。」

「ありがとうございます。キカイノイド四人のキーの代わりに彼らのコピー体を召喚できるギアを四つ差し上げましょう。まあ貴方が使用するかどうかは分かりませんが」

女性がそう口にし男がそう返すと女性はモバイレーツとゴーカイセルラーとレンジャーキー、ジュラン、ガオン、マジーン、ブルーのギアを纏めて手渡す。

「次に転生先の世界についてですが少年ジャンプに連載されている『僕のヒーローアカデミア』はご存じですか？その世界に行つてもらいます。」

「ああ個性がうんたらかんたらの一人前のヒーローになる漫画だっけ？」

「はい。それです。何か彼らと同じ個性はありますか？」

「いやいらん。ツーカーの力だけで大丈夫だ。強いて言うならオールマイトに勝てるぐらいの身体と戦闘能力とプリントとハカセみたいなメカニックにしてほしいのとさつきも言った通り生身でも戦えるようにしてくれ。」

「分かりました。最後に貴方の新しい名前を決めてください。それが決まり次第新たな世界に送ります。」

「じゃあイグニス・ゴルドツイカーとかで大丈夫か？」

男改めイグニスがそう言うと女性は再び手をかざしイグニスの体  
が光に包まれた。

## 第一話赤き海賊誕生!!

「ん……ここは……確かクロコダイオーの中か。本当に俺はツーカーザーの力を手に入れたんだな。それにしてもなんで寝落ちしてるみたいになってんだよ。あとなんか心なしか身体が小さくなってるような。」

イグニスが目を覚ますとそこはクロコダイオーの中であり自分の身長を気にしていると上から一枚の紙が降ってきた。

『ちよつと手違いで身長を伸ばすつもりが貴方を前世より身長が少しだけ低くなっていますが一、二年後には175から180くらいになるようにしてるのでご了承ください。そのお詫びに仮面ライダーや新たなスーパー戦隊ドンブラザーズをこつちの世界で貴方のテレビだけ見られるようにしておきました。』

「マジか。あの人神様なのにうっかりしすぎじゃないか？身長は166cmか。前より5縮んだか……ドンブラザーズやリバイスがまた見られるのは嬉しいな。でもヒロアカは見れなくなってるか。ヒロアカの記憶も綺麗さっぱり頭から消えてるしまあ記憶があつたら面白いしな。」

「そうだせつかくだからヒロアカの主人公緑谷出久に会いに行くか。あいつにゴーカイレッドの力を与えるか。でももし断られたら別の奴を探すしかないな。」

イグニスはゴーカイレッドのレンジャーキーとモバイレーツを手にとるとクロコダイオーから出て近くのビルの屋上に着地する。

しばらく歩いてみると近くの団地に救急車とパトカーが止まっておりイグニスが近くにいた人に話を聞くと

「ああ緑谷さんよこの奥さんが何かしらの原因で倒れたらしいんだ。無事でいればいいんだが出久の坊主は大丈夫かな？あいつただでさえ無個性という理由から虐められたりしてるらしいから引子さんが死んだらもう身が持たなくなる。」

「その出久という子はどこにいるか分かりますか？」

「今近くの公園で休んでいる筈だ。家の中も今検査中らしいからな」

それを聞いたイグニスは団地からすぐそこにある公園に向かうと出久が俯いたまま壊れたように同じ言葉を何度もブツブツと言いなからベンチに座っていた。

「おいさつきから同じ言葉を繰り返しブツブツ言っているが大丈夫か？」

「あつ・・・え？ごめんささい。母さんが急に倒れて心配で・・・僕は夢を見ちゃダメなのかな？僕無個性で学校でも虐められてて憧れの人からも『夢見るのは悪い事じゃないが現実を見ろ』と言われてちやつて」

「いやそんな事はない。夢というのはそう簡単に諦めるものじゃない。欲しいものと同様この手で必ず掴み取り突き進むものだ。」

「そこでだ。俺と一緒にこれを使ってその夢を掴み取ってみないか？別に嫌なら無理に受け取らなくてもいい。俺はお前の意志を尊重する。さあどうする？」

「なんだあいつら!?異形型の敵か？取り敢えず逃げろ!!」

その声に二人が様子を見に行くとそこには多数のゴーミンとスゴーミンが暴れていた。

「なんでゴーミンやスゴーミンが!?ザンギヤックは滅びた筈じゃなかったのか？それになんでこの世界に？」

「取り敢えず早速これを使ってみるか。おいそこを動くなよ。お前にはまだ戦闘は早い。動くだったら周りの避難誘導でもしておいてくれ。避難誘導も立派なヒーローのやるべき事だぞ。」

イグニスはギアダリングガーにセンタイギアをセットし舵輪を回転させる。

「チェンジ痛快」

回せー!! ツーカイザー!!

ヨーソロー!! ツーカイに、レボリユーション!!

トリガーを押しイグニスはツーカイザーへと変身した。

「ちよつと流石に今は踊りは省略するか。今の雰囲気で行ったら出久にふざけてんのかと思われちゃいそうだからな。まあ気を取り直してツーカイに行くぜ!!」



ツーカイザーは舵輪をタンバリンのように叩くとゴーミン達に向かって射撃攻撃と斬撃攻撃をする。

出久は避難誘導を終えるとツーカイザーの戦闘を隠れながら見ていた。

(すごい・・・まるで海賊みたいだけどヒーローっぽくてかつこいな・・・夢は掴み取るものか。よし僕もその力を使って皆を救おう。)  
「えっと・・・どう使うだろう？これを鍵の形にするのかな？」  
「ゴーカイジャアア〜!!」

出久はレンジャーキーをキーモードにしてモバイレーツを開きレンジャーキーをセットして回しゴーカイレッドにチェンジする。

「変わった!!それに体も大人みたいに大きくなった。よし・・・じゃあ派手に行くぜ!!」

ゴーカイレッドはゴーカイガンを発砲しながらゴーカイサーベルでゴーミン達を攻撃する。

「お前じつとしてろと言ったのに・・・まあいい取り敢えずこいつらを一気に片付けるぞ。」

「分かった」

ツーカイザーはギアダリンガーを更に回しゴーカイレッドはゴーカイサーベルにレンジャーキーをセットした。

「回せ!!回せ!!いっぱい!!」

「フア〜イナルウエーブ」

「ツーカイザーゴールドスクランブル」

「ゴーカイスラッシュ」

ツーカイザーはギアダリンガーから衝撃波を放ち、ゴーカイレッドはゴーカイサーベルから赤色の斬撃を放ちゴーミン達は爆散する。

ゴーカイレッドのスマホから着信があり電話に出ると

「はい、もしもし、え？母がそうですか・・・」

ゴーカイレッドは電話を切ると膝をつきマスクの中で涙を流した。

「おいちよつと悲しんでるところ悪いが質問してもいいか？これからゴーカイレッドの力を使うという事はお前の望むヒーローにはなれないかもしれない。それどころか敵扱いされるかもしれない。それ

でもいいか？嫌ならまだ引き返せるからモバイレーツとレンジャーキーを返せ。

「さあどうする？」

「いやそれでもいい……僕は……いや俺はもうヒーローになれなくてもいい。皆の笑顔と夢を守るためならどんなに汚い泥を被る。だから大丈夫だ。頼む!!一緒に戦わせてくれ。」

ツークイザーがそう言うのとゴークイレッドは覚悟をしたようにそう返答した。

「おい、お前ら何をしている!？」

するとヒーロー達が現れツークイザーとゴークイレッドを拘束しようとする。

「やばいな。逃げるぞ。取り敢えずそのバツクルからジュウオウイグルのキーを出せしたらゴークイチェンジと言え。」

ツークイザーはあるセンチギアを取り出しギアダリングガーにセットする。

『センチジャー!!ヨソロー!!センチタイにレボリューション!!』

トリガーを引くとゴセイナイトの幻影が現れツークイザーに重なった。

グランデイオンヘッダーに変化して飛び去っていた。

「ゴークイチェンジ!!」

ジュウウオウジャァー

次にゴークイレッドはジュウオウイーグルのキーを取り出してモバイレーツにセットしジュウオウイーグルへとゴークイチェンジする。

ジュウオウイーグル（GR）は野生解放をし空へと飛んでいった。

## 第二話へドロ事件

あれから一年後ゴーカイジャーとツーカイザーはヴィジランテとして名を馳せていた。

日本中の敵と汚い所業を裏で行なっている偽善ヒーローを倒して人々を救っていた。

それにより助けられた人や警察、殆どのヒーローは彼らに感謝して本当の英雄として称えていた。

だがその一方で一部のヒーローはゴーカイジャーとツーカイザーの事を快く思っておらず「自分達の手柄を横取りする」、「所詮海賊だから奴らも犯罪者に過ぎない」など悪口を言い捕まえようとしておりヒーローの間では賛否両論が広がると同時にヒーローへの批判は高まり続けていた。

そして今田等院商店街ではへドロのような敵が人質をとって暴れていた。

周りのヒーロー達は「私二車線以上じやなきや無理」、「爆炎系は苦手だ。今回は譲ってやる。」など突っ立っているだけで何も出来ずにいた。

そこに上空から赤、青、黄、緑、桃の5人が人質に当たらないようにへドロ敵に向かって発砲した。

「誰だお前ら!!」

「巷で噂の海賊戦隊だ」

「ゴーカイレッド!!」

「ゴーカイブルー!!」

「ゴーカイイエロー!!」

「ゴーカイグリーン!!」

「ゴーカイピンク」

「三三海賊戦隊ゴーカイジャー三三」

「派手に行くぜ」

「取り敢えずゴースターズで行くぞ。二人共」

「ああ」

「あいよ」

「『ゴーカイチェンジ』」

ゴッバスターズ

レッド、ブルー、イエローはゴッバスターズにゴーカイチェンジすると

まずはブルーバスター（GB）が怪力で地面を思いっきり叩くと人質がヘドロ敵から剥がれ落ち上空に飛んだところをイエローバスター（GY）が脚力で飛び上がり人質を受け止める。

次にレッドバスター（GR）が高速移動でヘドロ敵に攻撃を与える。「そろそろ終わりにするか。ハカセ、アーム。最後はタイムレンジャーで行くぞ」

「分かった」

「承りました。」

「『『ゴーカイチェンジ』』」

タ〜イムレンジャー

5人はタイムレンジャーにゴーカイチェンジするとボルティックバズーカを構えヘドロ敵に向けて「プレスリフレーザー」を発射しヘドロ敵を圧縮冷凍する。

元のゴーカイジャーに戻った5人は駆けつけた警察に圧縮冷凍したヘドロ敵を渡しそのまま去ろうとするとその場にいたヒーロー3人が5人を捕まえようとすると

「本当変わんないな。お前達偽善者は!!」とかお前ら実際何もしてないだろ。しかも人質に対して謝罪もせず勧誘とはふざけてるのか!!はつきりいって警察の方がまだ頼りになるし有用だ。さっさとヒーローやめて転職でもしてろ!!」

ゴーカイレッドがそう言うのと周りの人達もヒーロー達を責め立てるとデステゴロが周りの人達と人質に謝罪するとゴーカイレッドにお礼と謝罪を言った。

5人は召喚したゴーカイガレオンに乗り込むとその場から去っていった。

一方その頃ツーカイザーが敵を次々に退治していきその場から去

ろうとすると後ろの方から捕縛布が飛んできてツイカイザーはそれを避けようとするが左腕が拘束されてしまった。

「ヴィジランテのツイカイザー君だね？急に後ろから拘束しようとしてすまないね。相澤君離してあげて。」

後ろからスーツを着た鼠のような小動物が声を掛けると捕縛布が解けた。

「やあネズミなのか犬なのか熊なのかその正体は校長さ。まあそこは置いておいて私たちは君達と雄英に来てもらって話したいことがあるんだ。すまないけどゴークイジャーの5人をここに呼んでくれな  
いかな？」

### 第三話 雄英高校の勧誘

「やあよくこの雄英に来てくれてありがとうなのさ。すまないね。君達の貴重な時間を私達の為に潰してしまつて」

ゴーカイジャー5人とツーカイザーは雄英の校長室におり校長の根津と雄英教師である相澤消太が腰掛けていた。

「早速で悪いがお前達の顔を見せてくれ。マスクで顔が隠れているから何処の誰なのかが分からん。それじゃあ合理的ではない。」

相澤先生の言葉にピンクとグリーンは変身を解除して腰を掛けるがレッド、ブルー、イエロー、ツーカイザーは変身を解かず警戒を緩めないまま二人に武器を向けていた。

「ちよつと四人共!!折角話を聞いてくれるのになんで武器を向けてるの!?!」

「私もこの方々とは話を通じそうなのでなるべく穏便に事を進めたいです。だからマーベラスさん達も変身を解除して武器を下ろしてください。」

二人がそう言うのと四人は渋々変身を解除してソファに腰を掛けるが出久とイグニスと武器を下ろさずにいつでも攻撃する準備をしていた。

「少しでも何か変な動きしたら切るからな。まあ殺しはしないが暫くは再起不能にしてやる」

「おいそれは俺達のセリフなんだが・・・まあ無理もないかいきなり連れてこられたんだ。じゃあ次は自己紹介をしてもらつていいか?」

「断る・・・と言つてもハカセとアムがうるさいからな。じゃあ俺からだ。ゴーカイレッドと緑谷出久だ。こいつらからはマーベラスと呼ばれてる。次はお前だ。ジョー。ルカもジョーの次に名乗れよ」

「ああ俺は剣崎条・・・ゴーカイブルーだ。」

「私は仙葉瑠夏。ゴーカイイエローよ。というかどうせあんたら私達の事わかるんでしょ?なんでいちいち聞くのよ。」

「僕はドン・シールドです。ゴーカイグリーンです。よろしくお願ひします。あつ因みに皆からハカセと言われています。」

「私は壹俗哀夢と申します。またの名をゴーカイピンクです。以後お見知りおきを」

「最後は俺だな。俺はイグニス・ゴールドツイーカーだ。言わなくても分かるな？あと言っておくが俺も五人も無個性だ。」

「態々名乗ってくれてありがとうなのさ。では本題に入りたいがいいかな？」

「ああ好きにしろ。だがなるべく早く話を済ませろ」

根津校長がそう問うと出久がそう返し相澤先生が話を始める。

「では話に入ろう。お前達は一年間の間ヴィジランテとして敵やヒーローでありながら薬や臓器などの違法取引などをしていた奴らを倒し市民を幾度となく救ってきた。一部のヒーローや警察はお前達を英雄視して讃えている。だがそれを快く思わないヒーローが殆どだ。

でもそいつらは所詮金や名誉でしか動かない不合理な奴らだった。

そんな奴らに比べお前達は海賊とは名乗ってはいるが何も悪いことはしていない。」

.....

「で何が言いたい？イレイザーヘッド、普段合理的な考えのお前が俺達の事を認めるのか？あんたなら頑なに認めないと言いそうだが」

「確かに最初はそうだったが今の現状は俺達ヒーローの批判は高まり続けている。このままではヒーロー社会が崩壊して敵の思うがままになってしまう。だからお前達と協力関係になり今の現状を良くしなくてはならない。お前達を認めず敵扱いしてしまえば更に批判は続き拳句の果てには魔女狩りならぬヒーロー狩りが始まりヒーローを目指す未来ある子供にまで危険が及んでしまうかもしれない。だから頼む俺達と協力してくれ。」

「僕からも頼む。何よりもあれ程人に尽くしたくれている君達を敵と思いたくはないんだ。この言い方だと僕達が不祥事を隠蔽して責任から逃れようとしてると思われるだろうけどどうか僕達と協力してくれないか？」

相澤先生と根津校長が六人にそう言い頭を下げると

「話は分かった。だがそれだけでは協力する事はできない。」

と言うかたまったそれだけで俺達が簡単に協力するとも思ってるのか？

そもそも俺はヒーローが嫌いだ・・・協力なんて冗談じゃないと  
いいたいが、そうだな。お前達は知ってるだろ？ルカが孤児院で育つて俺達の仲間になる前は義理の弟妹達の為に何をしていたか。俺達も沢山恵んでやりたいが少ししか恵んでやる事ができない。実際この間も何者かの危害が及んでしまった。だから俺達の代わりにその孤児院に毎月大金と食べ物寄付しろ。それなら考えてやってもいい。」

「分かったのさ。喜んでその孤児院に出来るだけ寄付させてもらうのさ。何よりこれが償いになるかもしれないからね。」

出久はそう告げると根津校長はその条件を受け入れてた。

「では俺達が頼みたい事は一つだ。この雄英に入学して生徒になってくれ。今みたいに何かしらの条件をつけてくれても構わない。」

「ならまずは俺達のこの格好纏い私服で雄英に出入りする事を許可しろ。だから制服はいらん。理由は俺達はヒーローの駒や道具ではないからだ。二つ目に六人共同じクラスにしろ。別々のクラスには絶対にするなよ。三つ目は必ず怪人が現れた時は学校から出る事も許可しろ。」

最後にイグニス除く俺達を使うレンジャーキーは生徒と教師にも一切貸し出す事は禁止だ。お前達はこれも狙ってたんだろ？残念だったな俺達が他人においそれと貸し出すと思ったのか？もしそうなって敵の手に手に渡ったら大変な事になるし何より歴代の戦隊達の顔に泥を塗るからだ。今はこの四つだけだがこれらを許可したら入学してやる」

出久の条件に相澤先生は頷くと六人に契約書にサインをするように言いそれぞれ六人は契約書にサインをした。



## 第四話ゴミ掃除と建築会社の令嬢

出久とイグニスは今海浜公園でゴミ掃除をしていた。

「これで漸く海岸のゴミ掃除が終わるな。それにしてもよくあそこままで放置されてたものだな。というかヒーローまでここにゴミを捨てるとはけしからんな。」

「ああ、敵を倒すだけがヒーローじゃないからな。こういった奉仕活動もする大切な事を最近の奴らはそれが全く分かっていない。まあ海賊がこんなことやるのも柄にもないって言われるかもしれないが、あと明日は確か雄英の入試試験だったな。本来俺達はジョー達と一緒に推薦の方を受ける予定だったらしいが雄英に受ける奴らを見定める為だ。だから一般の方を受けるんだったよな。」

「あのくちよつといいですか？もしかしてゴークアイジャーの方々ですか？」

すると後ろの方から茶髪で首にマフラーを巻いた出久達と同年であろう少女が話しかけてきた。

「ああそうだが・・・何故分かった？俺もこいつも仲間以外に顔を見せた覚えはないんだが、と言うか誰？俺はお前に初めて会うんだが」

「あつ私は麗日お茶子です。この前は私の両親の会社の経営を良くして下さってありがとうございます。」

「麗日・・・そうか。確か前にルカが柄にもなく支援した建築会社の娘か。だが礼を言うならルカ本人に言ってくれ。あいつ一人がやった事だ。俺達は関わっていない。あとなんで俺達がゴークアイジャーだと分かったのかも聞いてるんだがそれも答えてくれ。」

「実は前に貴方達が変身する所を見ちゃって・・・でもヒーローにも警察にもあの事言っていないので大丈夫です。あと他のゴークアイジャーの人達は何処へ？支援してくれたルカさんって人にもお礼を言いたいんですが」

「まじか、まさか見られてた時があったとは俺もちよつと迂闊だったか。ああ今日ルカなら育てられた孤児院に帰って子供達と会ってるよ。」

他の3人も修行なり墓参りなり実家に帰るなりしてゐるぞ。」

「そういえばあの建築会社は三重県にあるはずだ。何故こんな所にいる？明らかに旅行に来たわけじゃ無さそうだし。ご両親はどうしてゐるんだ？」

「実は雄英に通う為に上京してきましたんです。お父ちゃんもお母ちゃんも一緒についてきてくれて。私前まではお金稼いでお父ちゃんとお母ちゃんを楽させる為にヒーローを目指すつもりだったけどルカさんが支援してくれたからお金を稼ぐ必要はなくなったと思つたけど私は元から人の喜ぶ顔が好きで人々を笑顔にするヒーローや孤児院の子達にお金を稼ぐルカさんの姿に憧れて改めてヒーローを目指したいなと思つて」

「そうか・・・金の為言うのは気に食わんが両親の為にやろうとしてる気持ちそのものは立派だ。寧ろ昔の俺よりも遥かにな。俺はたった一人で無個性の俺を育ててくれた母親を死に追いやつた・・・つまり殺したも同然の事をしてしまった。

そんな俺を捨てずに最後まで育ててくれた母親を俺は恩を仇で返した恩知らずだ。」

「さて話は変わるがお前の夢と努力を否定してるみたいだし俺もこんな事言いたくないが、お前の以前の夢の金稼いで両親を楽にさせるについてだが必ずしも稼いだ金が善良な行いから出たとは限らない。それどころか殆どヒーローの行いとは程遠い汚い事に稼がれた金の方が多い。そんな金を受け取つてもお前もお前の両親も喜ばないだろ？もしヒーローになったら場所にもよるが今言つた事を嫌がおうが無理矢理やらされるかもしれないんだぞ？そんなの嫌だろ？俺はお前に俺のようになって欲しくないし嫌な思いさせたくないんだ初対面の人間に言うのも変だがまだお前は引き返せる。さあどうする？言つておろくがヒーローになる代償はかなり大きいぞ」

「いえ、それでもうちは貴方やルカさんみたいなヒーローになって人々を笑顔を試してみせます。そんな汚い事をする人達には絶対に屈しません!!勿論貴方の言いたい事も気持ちも分かります。けど貴方達が他のヒーロー達から悪者扱いされてまで戦つているのに指咥え

てただ見てるなんてできません!!私も貴方達みたいに子供達の未来を守りたいんです」

出久が諭すように言う。麗日さんはそう強く二人に返した。

「ちっ!!そうか・・・なら俺はこれ以上何も言わない。ただこれだけは約束しろ。絶対に両親を大切にして悲しませるなよ。これを破つたら許さないしヒーローになる事も必ず辞めさせるからな。まあ例え死に掛けても俺が強引にでもこの世に戻してやるから、あと俺とこいつはお前と同じ年だ。だから敬語使わなくていいしタメ口で構わない。」

「いや一つだけ忠告をしておく。お前の行動次第で例えその気がなくとも他者を嘲笑ったり笑顔を簡単に奪ったりする事もあるから気をつけるよ。もしそんな馬鹿なことしたらお前を容赦なく叩き潰して二度とヒーローになれなくしてやる。いいな!!言つとくけど冗談じゃないからな。本気だ」

「え?貴方達うちと同じ年だったん?確かに童顔だけど雰囲気的にてつきり年上かと思つてたのに・・・あっはい。気をつけます。」

「童顔は余計だよ・・・ていうかなんでエコバックなんか持つてるんだ?そういうえばこの時間帯は近くのスーパーの特売やってるとか言つてたが」

「あっ!!お母ちゃんにお使い頼まれてたんだ!!すみません。うちはこの辺で失礼します!!早くしないと特売が終わっちゃう。」

麗日さんは出久にそう言われ自分の用事を思い出し走りながら去っていった。

「所でお前はなんて顔してんだ!!さつきから殆ど会話に入ってきていなかったが」

「あっイヤー。お前も変わって成長したなと思って。俺が最初会った時は子羊みたいで可愛げのあるオタクっ子だったのに、いつのまにかこんなツンデレで逞しくなってるなんか感激だな。ちよつと口調が辛辣なDＳっぽくなったけど」

「お前は俺をなんだと思つてんだ。一年も経てば色々変わるに決まつてんだろうがそして俺はツンデレじゃない!!あと誰が子羊だ!!」

## 第五話海賊の雄英入試

出久とイグニスは今雄英の試験会場におり少し時間が経つと実技説明担当のプレゼントマイクが現れた

「受験生のリスナー達!!今日は俺のライブによろこそ!!エビバディセイハイ!!」

実技試験の説明担当のプレゼントマイクが受験生達に向かってそう叫ぶが誰一人反応せずシーンとしていた。

「おい。なんだあのうるさい金髪男は?あんなのが今から試験の説明するのか?うるさくて鼓膜が破けそうになるんだが。まさかあの男もプロヒーローなのかよ? (小声)」

「確かあの男はボイスヒーロープレゼント・マイクだ。というかお前の方がこういうのに詳しいヒーローオタクだった筈だが。まあ無理もないか。ゴークイレッドになってからお前ヒーローも個性そのものが嫌いな上興味も0になったからな。無理もない。(小声)」

「おつとこいつはシヴィー!!では今から実技試験の内容をパパッと説明するぜ!!じゃあまずは十分間市街地演習を行なってもらうぜ。因みに持ち込みは自由だ。この後はそれぞれ指定された場所に行ってくれ。」

「会場には三種の仮想敵を配置しておいたからリスナー達の個性で行動不能にしてポイントを稼いでくれ。あと他のリスナーへの攻撃は当然違反行為だ。」

「質問よろしいでしょうか?!記載書には三種の敵が記載されていますがどういう事でしょうか?これが誤載であるなら雄英が絶対にしてはいけないミス!!僕達受験生はヒーローの基本となるべく指導を求めてこの場に座しているのです」

すると出久達の席のだいぶ前に座っていた真面目そうなメガネ少年がプレゼントマイクに質問した。

「OK、OK!!いい質問ありがとう。その件は今から説明する所だ。

だから誤裁ではないか安心してくれ。四体目のポイントはZER O。つまり攻撃しても無意味だ。即逃げる事をお勧めするぜ。」

「では最後にこの雄英の校訓をプレゼントしよう。かの有名なフラン  
ス皇帝ナポレオンは『真の英雄とは人生の不幸を乗り越える者』と  
言った。では良き受難を』

プレゼントマイクの説明が終わり出久はA会場、イグニスはD会場  
へとそれぞれ指定された会場へと向かった。

出久 sigh

「本当に大丈夫かよ。あいつらは一応外に口出しはしないし他の受験  
生には言わないように口止めしておくと言ってたがまあいいだろ。」

「ゴーカイチェンジ!!」

ゴーカイジャアアア!!

出久はモバイルーツにレンジャーキーをセットしてゴーカイレッ  
ドに変身すると自分を見る周りの目と声を気にせずにプレゼントマ  
イクの号令と共に走り出した。

「ゴーカイチェンジ」

ジュウウレンジャアアア

そしてティラノレンジャーのレンジャーキーをモバイルーツに  
セットしてティラノレンジャーにゴーカイチェンジするとティラノ  
レンジャー専用武器の龍撃剣を使い次々に仮想敵を破壊していった。

「多くなってきたな。ここは天装術を使いたいが他の受験諸共吹き飛  
んで妨害になってしまいかもしれんからな。これでいくか。」

「ゴーカイチェンジ」

ハッリケンジャアアア

「超忍法!!影の舞!!」

次にハリケンレッドにゴーカイチェンジすると大量の仮想敵の周  
りに障子のエフェクトが現れ次々に仮想敵に攻撃していき他の受験  
者を助けレスキューポイントも稼いでいると巨大なOPの仮想敵が  
現れそれを見るなり他の受験者は尻尾を巻いて逃げていった。

「なんだあいつらは、あれでもヒーロー志望なのか?情けない。ん?」

その光景を見たハリケンレッド(GR)が呆れていると仮想敵の近  
くに瓦礫に挟まれた少女がいる事に気づいた。

「あいつは昨日の・・・何やってんだ。俺との約束をもう忘れたのか

よ・・・」

「待ちたまえ!!君はあの仮想敵の相手をするつもりか?あれのポイントとはZEROだぞ?プレゼントマイクも逃げた方がいいって言うたはずだろ?」

「確かにな。だがな。その忠告を鵜呑みにして逃げていては人を救う事は到底できない。だから俺はあいつを倒す。」

「ゴーカイチェンジ」

シ～ンケンジャア～

先程プレゼントマイクに質問したメガネの少年がそう言うがハリケンレッド(GR)はそう返しシンケンレッドにゴーカイチェンジしてシヨドウフォンを取り出すと『守』のモヂカラを書き麗日さんの周りに結界を張り仮想敵からの攻撃から麗日さんを守った。

「烈火大斬刀・百花繚乱!!」

シンケンマルを烈火大斬刀に変化させるとシンケンレッド(GR)は飛び上がると烈火大斬刀を仮想敵に向かって振り下ろし仮想敵を一刀両断にし破壊した。

イグニス side

「出久と別々の所になってしまったか・・・まあ俺達と同じ所だと仮想敵全部壊して他の受験者がポイント取れないから仕方ないか。」

「チェンジ痛快」

回せー!!ツーカーイザー!!

ヨーソロー!!ツーカーイに、レボリューション!!

ギアダリンガーにセンタイギアをセットして舵輪を回しトリガーを押しツーカーイザーに変身するとプレゼントマイクの号令と共に走り出した。

早速大量の仮想敵がツーカーイザーを囲うがツーカーイザーは慌てる事なく

腰のツーカーイバックルからあるセンタイギアを取り出しギアダリンガーにセットした。

回せー!!シ～ンケンチェンジャー!!

ヨーソロー!!シ～ンケンに、レボリューション!!

「クールに侍、シンケンフォーム・・・いざ参る」

シンケンフォームにフォームチェンジしたツーカーザーは次々に仮想敵をソードモードにしたギアダリンガーで破壊していきそれと同時に他の受験者を助けレスキューポイントを稼いでると巨大なOPの仮想敵が現れそれを見た他の受験者は背中を向けながら情けない声を出し逃げていった。

「なんだこいつらは軟弱な。本当にあいつらヒーロー志望かよ。まさか出久の所も・・・まあいい。さっさとこいつを倒すか。」

回せ！回せ！いっぱい

「痛快斬、シンケン一閃!!」

シューンケンにドツキューン!!

ツーカーザーはギアダリンガーに烈火大斬刀の幻影を纏わせ仮想敵をあっという間に一刀両断にし仮想敵は爆散した。

## 第六話 雄英入学

雄英入学式当日の日出久は今墓地に墓参りしに来ており緑谷家と彫られた墓石をまずは水で清め次に花を手向けるとしやがみ手を合わせた。

「母さん・・・俺今日から以前は通いたかった雄英の生徒になるんだ：と言つてもヒーローとの協力の為と護衛するからなんだけどな。」

此処に来るたび何度も言っているがごめんな。ヒーローになりたいないなんて我儘言つて沢山迷惑かけた上死なせちゃつて・・・だがどうかこんな親不孝な俺（息子）を父さんと一緒に空の向こうで見守つてくれ。これ以上未来ある奴らを俺みたいにさせないしヒーローになるなんて馬鹿な事を考えて親を悲しませる奴らも増やさないから・・・と言つてもこの間ある建築会社の娘の背中を押すという矛盾な行動をしてしまったんだけどな」

出久は立ち上がりながらそう言うとその場を立ち去つた。

「悪いな。イグニス。俺の墓参りで時間をかけてしまつてどうしても母さんに報告したくてな。」

「いやいいさ。まだまだ時間はあるしこれからガレオンとクロコダイオーで行つても時間通りに間に合う筈だ。それと何も知らない俺が言うのもアレだがお前のお母さんが死んだのはお前のせいじゃない。だからそんなに気を病む必要はない。お前のお母さんもお前を恨んだりしてない筈だ。ほら行くぞ。4人が待つてる」

墓地の外で待つていたイグニスとそう会話をして出久は他の4人が乗ってるゴーカイガレオンに、イグニスはクロコダイオーに乗りそのまま雄英高校へと向かった。

暫くして雄英につき出久達は自分達のクラスを確かめると

「えーと俺達は・・・え？ヒーロー科1年S組!?そんなのあつたか？確かヒーロー科はA、Bの2クラスしかなかった筈だぞ?どうなってるんだ。」

「確かマーベラス・・・お前が必ず6人共同じクラスにしろと言つたから俺達専用のクラスが作られたんじゃないか?」



「でも大丈夫かなあ？失礼だけどヒーロー志望なのに怖い顔の子とかいないといいけど・・・というか仮にいたとしても会いたくないなあ」  
「何言ってるのよ。あんたはそんなだから周りからしょっちゅう弱いと思われて舐められるのよ。というかそこら辺の有象無象よりは頭いいし強いでしょ!?まあ戦い方が可笑しいけど」

「私は他のクラスの方々や先生方とも仲良くしたいのですが・・・あとハカセさんはいつまで私にくっついてるんですか?」

「兎に角こんな所で立ち止まってないでそのクラスに行くぞ。出久、ジョー、ルカ、ハカセ、アイム。早くしないと入学早々遅刻扱いされるぞ」

そして6人はS組のクラスに向かい少し彷徨いながらもS組のクラスに着いた。

「はあ、やつと着いた。聞いてはいたが広すぎる。と言うかドアがデカイな。」

「まあどんな個性持ちでも入れるようにしてるんだろ。」

出久がドアを開けるとそこには黄色いマントをつけた小柄の老人がそこにいた。

「お思ったより遅かったな。」

「あんたは確かグラントリノか。何故あんたが此処に?てつきり担任は相澤かと思っただが」

「元々一年間だけが此処の教師をしてた事がある。俺は根津校長に数少ない面識のある俺がお前達の担任になるように頼まれて復帰した」

「取り敢えず一年A組に行くぞ。殆どお前達は相澤のクラスと合同で行動するらしいぞ。因みに入学式は飛ばすらしい。お前さんも出るの嫌だろ?分かったら変身して今すぐ向かうぞ。」

老人もといグラントリノはそう言い6人に変身するよう促し6人は変身してグラントリノと共にA組の教室に向かった。

「お友達(づ)っこなら他所でやれ。此処はh「何してんだ。貴様は!!見るからなみつももない格好をしゃがってまるでヒーローというより不審者じゃないか。本当にお前雄英の教師か!?!」

A組の教室の前には寝袋に入って10秒チャージを口にしてる相澤先生がおりゴーカイレッドはそう言いながらゴーカイガンを相澤先生に向けた。

「一体何をするんだ。緑谷。これが一番合理的なんだよ。まあいい。静かになるまで8秒掛かりました。君達は合理性に欠くね。取り敢えずこいつを見て興奮する気持ちは分かるが落ち着け。取り敢えずこれ着てグラウンドに出ろ。お前もこれをあいつらに渡せ」

相澤先生はゴーカイレッドを見てざわつくA組にそう言いゴーカイレッドに体操服を渡しそれを配るように指示をした。

ゴーカイレッドに渡された体操服に着替えたA組はグラウンドに集合した。

「個性把握テスト!?!」

「え?入学式はガイダンスは?」

「ヒーローを目指すから入学式なんて悠長な行事でる時間はないぞ。」

「ゴーカイレッド、お前体育のソフトボール投げの記録は?」

「何故俺なんだ。そう言うのは首席合格者がやるんじゃないのか?確か前は力が弱かったからほぼ平均より低いくらいだよ。言っておくがゴーカイチェンジは使わないからな。あれはこんな事に使うものじゃない。それに大丈夫なのか?こいつらの心を折りかねないと思うのだが」

「そうか。ならこれ使って見本として全力で投げろ。これが終わったらお前達は何もしなくていい。」

相澤先生はゴーカイレッドにボール型の機械を渡してそれを投げるように言いゴーカイレッドは円から出ないように全力でボールを投げ記録は?だった。

「おお流石ゴーカイレッド!!それにしても個性思いつきり使えんだ。面白そう。」

これを聞いた相澤先生は八種目全部の記録が最下位だったものは除籍処分すると生徒達に告げそこからA組の個性把握テストが勢いよくスタートした。

個性把握テストが終了して相澤先生により記録が表示され最下位だった葡萄のような丸い物を何個か頭に乘せた小柄の男子が膝を突き落ち込むが

「因みに除籍は嘘な。君らを焦らせて本気を出させてる合理的虚偽」

「あんなの嘘に決まってるじゃない。少し考えれば分かりますわ」

「いや。相澤はああ言っているが本気でお前達を見込みがなければ除籍してた筈だ。それに去年の一年生は皆入学初日で除籍処分を喰らっている。だからって気を抜いたり相澤の優しさに甘えたりするなよ。言っておくが俺は相澤や他の教師と違って甘くないからな。じゃあ教室に戻ってカリキュラムがあるらしいからそれを読んだら帰っていいらしい。じゃあ俺達はこの辺で」

相澤先生のその言葉にゴーカイジャー、ツーカイザー、一部の除く生徒全員が声をあげて驚きポニーテルの少女が呆れながらそう口にするがゴーカイレッドはそれを否定するように相澤先生がやろうとしていた事をA組全員の前で容赦なく説明した。

「おい。ちょっと厳しく言い過ぎじゃないか？まあ言いたい事は分かるけどお前生徒達の心を折りたくないとか言っておきながら思いつきり折りそうな事言ってるじゃないか。まあお前の夢を否定したあの男みたいにかいつらの夢を否定してないからマシだからまだいい方だけど。ごめんな。こいつちよつと言いきついでだけで本当はい奴だから悪く思わないでやってくれ。今の言葉もお前達を思ってた筈だから。でも俺もこいつも相澤よりヒーロー基礎学などの授業の時は甘くないしかなり厳しくいくから覚悟しておけよ。」

ツーカイザーはゴーカイレッドのフォローをするように言う而他の五人と共にその場から去っていた。